

〔論文〕

構成的グループ・エンカウンターを用いた 子育て支援の試み

—TEA（複線経路等至性アプローチ）による母親の心情変容の分析—

高 橋 智 子
Satoko Takahashi

大阪総合保育大学
総合保育研究所

渡 辺 俊太郎
Shuntaro Watanabe

大阪総合保育大学
児童保育学部

育児ネットワークを持つことが困難な現代の母親たちは、地域子育て拠点に対して人とつながり気軽に話ができる環境を求めていると考えられる。本研究では、母親が人とつながり気軽に話ができる場を提供する子育て支援の方法として、構成的グループ・エンカウンターを取り入れた活動を行い、参加した母親の心情の変化を分析して、支援の有効性について検討することを目的とした。具体的には、構成的グループ・エンカウンターの一つであるすごろくトークを支援方法として実践した後、参加した母親にインタビューを行い、複線経路等至性アプローチ（TEA）によって質的分析を行った。分析の結果、人とのつながりを求めていなかったり気を遣いながら会話をしたりしていた母親が、すごろくトークでは気軽に会話ができたことで肯定的な変化が見られた。すごろくトークを用いた支援の有効性ととも、母親同士をつなぐ支援者の役割の重要性が示された。

キーワード：子育て支援、地域子育て支援拠点、構成的グループ・エンカウンター、複線経路等至性アプローチ

1. 問題

1. 現代の育児ネットワーク状況

少子化の進行に伴って、様々な子育て支援施策が策定されたが、出生率低下傾向には歯止めがかかっていない状態である。出生率低下の社会的背景として、地域共同体の機能が失われていることが指摘されている。現代の生活・住居環境では、一戸一戸が独立した作りとなっていることから、隣近所の人と顔を合わせる機会が減少したことで、近隣ネットワークが築かれにくくなっていると考えられる。また、落合（1994）が述べているように昭和前半に生まれた世代はきょうだい数が多く、身近な社会的ネットワークはきょうだいネットワークが中心となっていたが、80年代になると両親のきょうだい数が減少していることからきょうだいネットワークも失われ、また、両親が高齢になっても働いているケースが多いため親族ネットワークを維持することが難しくなっていると推察される。

しかし、何時の時代においても子育てには、人と人がつながる、すなわち育児ネットワークは不可欠である。

その効果について松田（2008）は「充実した育児ネットワークがあることは、親の育児力を高めて、子どもの発達を支える効果もある」と述べている。

また、汐見（2010）は今の子育て状況について「人々はお互いのプライバシーに立ち入らず、必要以上に交流することもない生活をしている。家族は自分たちなりの『家族らしさ』を大事にしながら子育てしているが、子どもが近隣の人々と交流することもなくなり、子どもは限りなく地域から家庭内に囲いこまれていく。近隣からの撤退は、社会からの孤立、孤独の中での子育てにならざるをえない」と述べている。科学の発展やインターネットの普及によって生活が楽になっている反面、直接人と会わなくても生活ができる環境や、問題点が発生した場合においてもインターネットを活用して調べられるなど、人を頼る・人を介して解決する機会が減っていると考えられる。

このように、子育て中の母親の置かれている社会的環境は、人と気軽にかかわり会話することのできる機会や場所が減少し、生活の利便性が向上したことによって人を頼る機会も減少したことで、育児ネットワークを持つことが困難になっていると推察される。

2. 地域子育て支援拠点における母親へのかかわり方

子育てで何が母親に困難や不安を感じさせるのかとい

う視点において、東ら（2009）は「①母の子育てへの自信のなさ ②母の他者評価が気になりプレッシャーになる傾向 ③母自身から頼らない・頼れない傾向 ④祖父母が親育ちの助けにならない傾向 ⑤母自身、自分の意志が子どもに通じるのが当たり前と思うこと」という5つの要因を見出した。また、浦山ら（2009）が母親の身近な人間関係のストレス感を調査した結果、「子ども」に6割、「夫」に5割と高い割合でストレスを感じていることが明らかとなった。子どもがかわいいとは思っている、一方で子どもにストレスを感じており、子育てに自信が持てないものの他者を頼ることもできない母親像が示されている。出産を機に常に子どもと一緒にいる生活が始まることや、子ども中心の生活リズムとなることは当たり前のことと受け止められやすいために、母親の心理的困難感はなかなか表に出にくく、理解されにくいと推察される。

そのような困難感や不安感をもった母親が、子どもと2人だけの家庭の空間から脱却するために、人が居る空間、話ができる環境を求めて近所の地域子育て支援拠点を利用していると考えられる。しかし、地域子育て支援拠点での活動内容は、親子ふれあいあそび・親子リトミック・お誕生会・園庭開放など、母親が常に子どもの横に居ることを求められる内容が多く、子どもの保護者としての立場で行動することが強いられやすいと考えられる。中谷（2014）は母親が常に子どもと一緒に居なければいけないことに対して、「親責任のまなざしが強い社会の中で『子どもから目を離してもよい』という考え方は、母親ではない『自分』にふと返ることの貴重な時間を生み出すものとして機能していると思われる。母親の主体性やエンパワメントの促進を考えると、こうした『自分』に返る時間こそが、その出発点になるものと思われた」と述べている。

また、中山（2016）の地域子育て支援拠点を利用する母親へのアンケート調査から、気軽に話ができる仲間を求めている人が多くいたことが報告されている。地域子育て支援拠点における活動の内容として、母親が人とつながり気軽に話ができる環境を提供しつつ、子どもから一時的にも離れる時間を設定して「自分」に振り返りエンパワメントを促進する内容を検討していくことが必要ではないかと考えられる。

II. 目的

1. 地域子育て支援拠点における子育て支援に必要な要素

母親が人とつながり気軽に話ができる環境に関して、

地域子育て支援拠点における親子が自由にあそべる「ひろば」などは、気軽に母親同士がかかわり話をする事ができる場として設定されている。しかし、母親の中でも自ら行動して対人関係を結ぶことが苦手な人や、上述した東らが述べていたような他者評価をプレッシャーと感じている母親にとっては、初めて出会う人と話をするという行為は困難であり、時によってはストレスと感じ、子育て支援拠点を利用しなくなる原因の一つとなる可能性もあると推察される。

そこで、地域子育て支援拠点における子育て支援においては、人とのつながりをより円滑に形成するための活動内容を取り入れる必要があると考えられる。同時に、母親の育児への自信のなさや不安をとりぞくことができるような支援者との関係を築くことも、支援活動には欠かせない要素であると推察される。

以上より、人とのつながりがより円滑に形成できるような子育て支援に必要な要素を整理すると、①子どもと離れて一人の女性として参加できる場であること ②気軽に話ができるようにすることを意図した活動 ③母親同士が気軽に話ができるようにつなげ、支援者となるスタッフの存在 ④母親が人と話すことを通して育児に対して肯定的感情を持てるようにすることの4点であると考えられる。これらの要素を含む支援方法として、本研究では構成的グループ・エンカウンターを活動の中に取り入れることとする。構成的グループ・エンカウンターは、構成された条件の中で他者とかかわることによって自分や他者、人生に関する気づきを促す集団援助技法である。構成的グループ・エンカウンターを親育ちセミナーにおいてコミュニケーション作りの方法として取り入れた富田（2010）は「親同士そして保育者等との主体的なコミュニケーションを促進することができ、今後の新しい親教育アプローチとしての可能性がある」と述べている。

2. 研究目的

本研究では、母親が人とつながり気軽に話ができる場を提供する子育て支援の方法として、構成的グループ・エンカウンターを取り入れた活動を行い、参加した母親の心情の変化を分析して、支援の有効性について検討することを目的とする。構成的グループ・エンカウンターの内核は、「自己理解」「他者理解」「自己主張」「信頼体験」と設定した。それぞれの内核の達成が期待でき、地域子育て支援拠点の利用者である母親同士の関係を築くために必要とされる会話を容易にする活動内容として、「すごろくトーク」を基本のエクササイズとした。また、実施の際には母親たちが少しの時間でも子どもと

離れ、一人の女性として参加しながら会話ができるように環境を設定した。

子どもから離れて多様な人と会話するすごろくトークを主体とした活動内容を体験した母親の心情変化の分析を行い、支援の有効性について検討することによって、子育てに対する不安感・困難感が生じやすい時期の母親に対する支援のあり方に関する示唆が得られると期待される。

Ⅲ. 方法

1. 研究協力者

近畿圏にあるA市には、市の委託による子育て支援拠点が4拠点ある。その内の1拠点であるB子育て支援拠点は、駅に近く利用も多いことから、研究実施場所として選定した。

研究協力者は、B子育て支援拠点のつどいの広場（以下、広場とする）・一時預かり（以下、預かりとする）を利用していることに加えて、支援者から見て子育てについて少し不安が感じられる人や反対に子育てについてあまり悩みを持っていない印象の人、A市に引っ越してきた人、夫が単身赴任中の人などいろいろな生活環境の中で子育てをしている母親が含まれるようにした。多様な立場の母親同士がかかわることができるように、子どもの年齢や子どものきょうだいの数は偏らないように6名の参加者に協力を依頼し、同意を得た。基本属性は表1の通りである。

2. 調査と倫理的配慮

2020年11月から12月にすごろくトーク（構成的グループ・エンカウンター）の活動を3回行い、2021年1月にインタビュー調査を行った。

研究協力者にはインタビュー調査の説明書（調査の概要、インタビュー内容、参加と撤回の自由、権利の保障、個人情報の取り扱い、研究成果の公表などにつ

いて記載した）を確認してもらった後、「調査への同意書」に記入してもらい回収した。子ども同伴でのインタビューのため、子どもの体調や機嫌によって中断することや、時間的配慮を行った。

質問内容項目は、上田（2018）を参照し、半構造化面接において ①拠点を利用する前の子育てに対する気持ち ②拠点を利用するきっかけ ③初めて拠点を利用した時の印象 ④すごろくトークに参加しての気持ち ⑤すごろくトーク参加後の拠点を利用したときの気持ちの5点についてのインタビューを行った。インタビューの際には、リラックスして会話に集中できるように、子どもは別部屋でスタッフと一緒に過ごせる環境を整えた。

3. プログラム全体の流れ

本研究のすごろくトークの実施はB子育て支援拠点の広場の活動のない木曜日の13時30分から15時までとした。活動にかかわるスタッフについては、進行役の主担当者が1名、参加者と一緒にトークをしつつ参加者同士の橋渡しを行う役として1～2名がすごろくトークに参加した。橋渡しの役割としては、母親たちが気楽に話せるように緊張を解く人的環境となることや、子どもを育てた経験者としての情報を話すこと等とした。また、母親たちが少しでも子どもと離れて一人の女性として参加できるように子どもの世話役を2名配置した。

すごろくトークを始める前に参加者にシールを渡し、エクササイズ中に呼んでもらいたい名前を記入してもらった。意図としては、出産したと同時に「〇〇ちゃんのお母さん」と呼ばれるようになり、自分の名前を呼ばれる機会が減っている状況に対して、一人の女性として参加してもらうためである。また、参加者が場やお互いに慣れることを重視し、ウォーミングアップのエクササイズとして、それぞれが記入した名前を呼び合うナンバーコールを行った。名前を呼び合うことによって、相手を見て覚えたり、呼び名の由来を聞いて相手を知るこ

表1 研究協力者の基本属性

	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん
居住年数	30年	8年	2年	6か月	6か月	1年4か月
子どもの年齢と性別	3歳（男） 1歳（女）	0歳（男）	3歳（男） 0歳（女）	2歳（女）	1歳（男）	3歳（男）
地域とのつながり	あり	なし	なし	なし	なし	なし
拠点の主な利用	広場	広場	広場 預かり	広場	広場	預かり
すごろく体験回数	2回 (2・3回目)	2回 (2・3回目)	3回	3回	3回	1回 (3回目)

とにつながったりすることも意図した。お互いに名前を呼び合えたことを確認した後、すごろくトークの活動を始めた。

すごろくトークの内容は、資料に示しているように自分自身についての項目、結婚観や夫婦間についての項目、子どもに関する項目などを設け、これらを通して生活や子育てについての情報交換ができることを意図して作成した。すごろくトークの進め方については、母親と橋渡し役のスタッフで順番を決めてサイコロを順次振り、自分のコマが止まったマスに書いてある話題について話をするようにした。また、他の人の話に対して質問をすること、話したくない内容についてはパスしてよいことを参加者同士のルールとした。

なお、構成的グループ・エンカウンターではエクササイズ後に通常シェアリングの場を設けることが基本であるが、今回はすごろくトーク後に参加者が感じたことを自然に出し合っていた雰囲気であったことから、すごろくトーク後に進行役が投げかけて感想を言ってもらう形式でのシェアリングの時間は設けなかった。個人的には、インタビューの際にすごろくトークに参加しての感想を聴取した。

また、富田（2010）の実施した構成的グループ・エンカウンターのねらいは「ふれあい体験」と「自己理解」であり、行ったエクササイズも握手などのふれあいがあり、体験者の感想には「人とのふれあいが良かった」という意見が91%と多く示されていたが、今回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ふれあうエクササイズは行わなかった。

4. 分析方法

本研究では、構成的グループ・エンカウンターを取り入れた支援活動に参加した母親の心情の変化を分析して、支援の有効性について検討することを目的としている。そのためには、母親の出産・育児経験から子育て支援拠点の利用・すごろくトーク体験後までの時間の中で、母親の心情の変容を可視化する必要がある。そこで、それに適した質的分析方法の一つである、複線経路・等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：以下、TEMとする）によってインタビューデータを分析することとした。

分析の手順は荒川ら（2012）を参考にした。まず、6名の録音したインタビューデータを逐語録化し、インタビューデータの意味を解釈しながら語りの意味のまとまりごとに切片化した。切片を時系列順に並べた上で同じ内容のものはまとめ、当人の行動や感情、認識、状況など、経路の要素や社会的方向づけ・社会的助勢として捉

えられるものにラベルをつけ、経路を描き出した。この手順によって、まず6名のインタビューデータについてTEM図を6枚作成した。その後、6名分のTEM図において共通している要素を統合し、共通していない経路は複線経路として記述する手続きによって、総合TEM図を作成した（図1）。

TEMを用いて分析しTEM図に示していく際、非可逆的時間（Irreversible Time）の流れのなかで、等至点（Equifinality Point：EFP）に向かう歩みと、物理的・精神的な妨げになるような社会的方向づけ（Social Point：SD）と、それとは逆に、後押ししたり導いたり道標になったりする社会的ガイド（Social Guidance：SG）、経路が分かれる分岐点（Bifurcation Point：BFP）、という概念を整理する必要がある（安田ら、2012）。また、等至点を一つのものとして考えるのではなく、それとは対になる両極化した等至点（Polarized Equifinality Point：P-EFP）のようないわば補集合的な事象も必ず等至点として研究に組み入れることが要請されている。各概念の意味合いについては、上田（2018）の複線経路・等至性モデルの用語を参考にし、表2にまとめた。

本研究では、構成的グループ・エンカウンターを取り入れた子育て支援プログラムを経験した母親に肯定的な変容がみられるか否かを明らかにすることが必要であり、参加後について母親たちから参加者への肯定的な関心やかかわりが語られていたことから、「人とかかわることが増えた」を等至点（EFP）と設定した。また、必須通過点（OPP）として、「出産と子育ての開始」を設定した。社会的方向づけ（SD）は「人とかかわりたくない」「人に頼れない」方向へと進ませる環境要因とし、社会的助勢（SG）は「人とかかわりたい」「人に頼る」方向へと進ませる環境要因とした。

IV. 結果と考察

1. 総合TEM図

総合TEM図を図2に示した。6名それぞれのTEM図を作成・分析した結果より共通項を見出し検討した結果、母親たちのたどった経路を4つの時期に区分することが可能であった。第1期は「「出産」から「子育て支援拠点を知るまで」、第2期は「A市の子育て支援拠点を利用するまで」、第3期は「拠点を利用して、すごろくトークに参加するまで」、第4期は「すごろくトークに参加してから参加後の拠点を利用するまで」である。各期における母親の心情や、影響した要因について考察する。

表2 TEMの理論を構成する基本概念

概念用語	意味	本研究における位置づけ
等至点 (EFP)	複数の経路が到達するポイント	人とかかわることが増えた
両極化した等至点 (P-EFP)	等至点とは価値的に対になる到達ポイント	人とかかわることが増えなかった
必須通過点 (OPP)	倫理的・制度的・慣習的にほとんどの人が経験せざるをえない地点	出産と子育ての開始
分岐点 (BFP)	ある選択によって、各々の行動が多様に分かれていく地点	人とのかわりによる影響に促された、子育て支援拠点の利用や事業への参加
社会的方向づけ (SD)	等至点から遠ざけようと働く力	家庭環境や育児への困難感・子育て支援拠点での他の母親との関係
社会的助勢 (SG)	等至点へ至るように働く力	多種多様な人とのかわりによる会話・支援者の存在

(1) 第1期「出産」から「子育て支援拠点場所を知るまで」の時期

出産する前に、ある程度の予備知識を持って赤ちゃんを迎える生活を始めているが、実際に子育てが始まると「一人でしないといけないから不安しかない」「子どもが生まれて仕事を辞めたことで、孤立している感じ」など、出産直後に子育てや自分自身の生活変化への不安や負担、孤立感を感じていることが語られた。その際、母親が人を頼れる環境に「いる・いない」ということが分岐点となっていることが示された。この時期にまず母親が頼ろうとしている相手は、実家の母親であった(例1)。出産直後の不安や孤独感は、母親自身の今までの親子関係に大きく影響されていることが推察される。ただし、実家の両親との関係が良好であったとしても、高齢でも職をもち働いている人が増加している現代社会においては、ますます実家の母親を気軽に頼ることが困難になって孤独を感じる母親が増えてくのではないかと危惧される。その課題に対して、肉親ではない知り合いや、子育て支援者の役割が重要になると考えられる。

例1 【出産直後における、母親の頼れる人の存在に対する気持ち】

- ・夫が海外赴任で、実家の両親も働いているので頼れないし、不安しかない(D)
- ・里帰りしてよかった(G)
- ・母親との関係が良くないので、他人に頼ることも得意じゃないし、頼る方法も知らない(H)

また、子どもが2か月を過ぎると生活リズムが個々それぞれとなるため、予備知識や育児書に載っている内容だけではなかなか解決できないことが増えてくると推測されるが、その際、Gさんの場合は実家の母親以外の専

門知識を持った人に育児相談できたことで悩みが解決でき、肯定的感情を持つようになった。一方、Cさんの場合は同じ年齢層の子どもを持った母親の育児相談会に参加して、他の母親はできているという言葉を開いただけで、「自分だけでできていない」と受け止めて自分を追い込んでしまった(例2)。出産直後という新生児を中心とした緊張した日々の生活の中で、母親としての初めての会合では、できている自分を見せたい・評価してほしい気持ちが強くなる場合もあると考えられる。そのため、同じような月齢の子どもをもつ母親同士の間では、他者の言葉が聞く側にとってはSDやSGとも受け止められるのではないかと推測される。せっかくの人とのかわりがSDにならないように、母親同士が話をする環境やプログラムの流れを吟味することが必要であると考えられる。

例2 【不安や悩みの解決法の違い】

- ・子どもがずっと寝ていて授乳しないことに悩んでいた。母親からの助言もあったけど取り合わなかった。検診で看護師に話を聞いてもらおうと、ピリピリした感情も消えて、ほっとしすぎて泣いてしまった(G)
- ・相談会でみんな早く寝るって聞いて、なんでこんなに違うのって思って。私が(寝る習慣を)つけてあげれていないのかと思って(C)

(2) 第2期「A市の子育て支援拠点を利用するまで」の時期

A市に引っ越してきた人が6名中4名いた。「知り合いがいない新しい土地」は母子にとって孤独・孤立にさせてしまう環境となりSDと捉えられる要因の一つだが、知り合いがいないからこそ子どもが遊べる場所、人

がいる場所をすぐに探す動機づけが高まったと考えることもできる。Fさんは、引っ越し前に利用していた子育て支援拠点のイメージから、育児仲間を探すというよりも子どもの遊び場を求めて拠点を探していた（例3）。一方、産後うつ症状が出ていたHさんは「しんどい」という気持ちを発信していたことから、A市に引っ越して来た際、保健師と一緒にカウンセリングに通い、子育て支援拠点の利用を勧められ利用に至っている（例3）。利用に至る状況は異なるが、「子どものため」に動いている母親の姿が示されている。

反対に地域のつながりがあるCさんは、市内の情報が手に入れやすい環境にいて、子育て支援拠点の場所も把握できていたと推測されるが、利用にあたっては育児友だちができてから一緒に来ている。Dさんも学生の頃にA市に居住していたことから、市内の情報は入りやすい状況ではあったが、夫が単身赴任中であり、実家の親からも支援を受けにくい状態であったことから「自分が倒れたら子どもの面倒は誰も見てもらえない」という緊張感と不安感が強くあった。そのような中、市からの電話があり地域の友だちに場所を教えてもらったことでようやく利用に至った（例3）。地域の情報を得やすいことや友人はSGとして機能はしていると考えられるものの、拠点の利用に至るには第三者の後押しも大きな役割を果たすのではないだろうか。

このように、ニーズや状況はさまざまであるが、それまでの子育て環境に欠けているものを求めて母親が子育て支援拠点の利用に至る過程が示された。子育て支援拠点の支援者は、母親それぞれのニーズや来所の経緯を把握したうえで、支援を行っていくことが望ましいと考えられる。

例3 【地域子育て支援拠点を利用ようになった理由】

- ・A市に引っ越してきた時に保健師に、子育て支援拠点の預かりを週1回使用して、自分を休ませてあげるとはいいことですよと背中を押されて、利用することになった（H）
- ・拠点に行くようになったのは市からの電話があって、近くに友だちが住んでいたからかな（D）
- ・子どものためで、人とのつながりを求めたくて来ていない（F）

（3）第3期「拠点を利用して、すごくトークに参加するまで」の時期

拠点を利用する目的が、子育て仲間を求めている人と、子どもの遊ぶ場所を求めている人という違いによって、スタッフや他の母親とのかかわり方が変わることが

可視化された。

初めて拠点を利用するきっかけが同じ月齢の子どもを持った母親同士の講座だった場合、会話が離乳食や服装・睡眠など尋ねたい内容が似通っていることから会話が容易であり、加えて講座にはスタッフが常駐し、参加者同士をつなげる役目も担っていることから、同じ月齢の子どもを持った母親同士の集まりはSGとなっていたと考えられる（例4）。ただし、会話の内容は子どもや育児のことが中心であり、あくまでも母親としての会話をする場であったと推察される。

一方、個人的に広場を利用している母親は、他の母親に対して「何か話をした方がいいのかも」という相手への気遣いの気持ちが語られた。実際に母親だけの場になると子どもの年齢も違うことから、共通点が分からない・会話が続かないといったことが、初めて出会う母親同士においてはSDとなっていた（例4）。友だちと一緒に利用している母親は、話す相手が必ずいるため緊張することなくグループで過ごしているものの、もし個人で行動するようになった時には子育て支援拠点を気軽に利用しづらくなり、離れていく場合もあるかもしれない。

このように、広場に親子が来て交流しており、事業目的が達成されているように見える場合であっても、母親の心情としては他の親子に対して気を遣い、気軽に会話ができていとは限らないと考えられる。交流を促進していくためには、母親同士をつなぐ橋渡しとしてのスタッフの役目が重要となると考えられる。

例4 【拠点を利用した時の他の母親とのかかわり】

- ・意外と同じ月齢の子がいて、他愛のないことを喋っただけでも結構気分は晴れた（D）
- ・スタッフの人たちが親切に会話してくれるから、子どものためと思って来てたけど、自分の息抜きになっているかな（F）
- ・喋りたいけど別に聞くことないし、悩みって別にないから、どうしようって思うけど喋りたい気持ちはある（F）
- ・話せたらいいなって思うけど、まったく接点のない人と何を話したらいいのかって思います（G）
- ・結構赤ちゃんママの時に辛いのも、なんか話題に困る感じ（H）
- ・グループで来てたから、他の人とは共通点があったら喋るけど、そこはそこって感じかな。ちょっと喋りにくいかな（C）

(4) 第4期「すごろくトークに参加してから参加後の
拠点を利用するまで」の時期

すごろくトークでは、子どもと離れ、止まったマスの内容に沿って会話を進めていった。トーク内容は子どもや子育てについてだけでなく、自分自身や家族についてなど幅を広げたことが新鮮にうけとめられたようである(例5)。トーク内容には普段話題に取り上げられないような家族についての肯定的な話も含めたが、すごろくトークで指定された内容だったことや、スタッフが参加者同士を結ぶ懸け橋の役を行ったことから、自慢話として受け取られるのではなく、参加者を肯定的に理解する要因となり、子育てに対しての情報にもなっていた。Fさんは、幼稚園の未就園児クラスでの経験から、母親同士の会話では夫への愚痴を言わなければ話が合わないのではないかと不安に思っていたが、今回は肯定的内容を話すことができ、他の母親からも肯定的な話が聞けたことで気持ちが楽になったと語っていた(例5)。このように、会話の内容がすごろくによって決められていたことが、逆に母親にとっては子どもや子育てについてのみにとどまらない話をする場となり、肯定的な感情につながっていたと考えられる。

また、すごろくトーク中に自分から離れて遊んでいる子どもの姿を見て、その楽しそうな様子から自身も嬉しい気持ちになったことが語られた(例5)。子どもの行動をずっと見守らないといけないという状況から短時間でも解放されることは、気持ちをリフレッシュさせるだけでなく、子どもや子育てについて客観的に見る機会にもなり、母親をエンパワメントする効果があるのかもしれない。

例5 【すごろくトークに参加しての気持ち】

- ・視野を広げてくれる意味ですごく面白かった(H)
- ・そんな家もあるんだなって思いました(E)
- ・自分自身の話を拠点では全然しないから、新鮮で話せるのって楽しいなって思いました(H)
- ・(ポジティブなことを言うことに対して)遠慮してなかったし、他の人の話に合わせないといけないと思わなかった(F)
- ・家のことを他の人が「いいな」って言うってくれるから、プラスにしかない(G)
- ・自分もそうですが、子どもがすごく楽しそうにしていたから、子どもが楽しいと私も嬉しいんだと感じた(H)

すごろくトークに参加した後に広場を利用した際については、他のすごろくトークの参加者に対して「来てるかな」「いたらいのに」という思いが語られた(例6)。

すごろくトークにおいて人と話せて楽しかったと感じ、他の母親に対して肯定的な印象を持った結果、広場に一緒に参加することを約束し合った関係ではなく、「会えたらいいな」といったちょっとしたつながりが形成されたのではないかと考えられる。初めての人と話すことに対して困難感を持ち、一時預かりのみを利用していたHさんは、すごろくトークに参加した後に広場も利用するようになった。すごろくトークでの肯定的な体験を通して、子どもの年齢や家庭環境も違う相手とのかかわりが増え、等至点に至ることができたと考えられる。

例6 【すごろくトーク後の気持ち】

- ・参加した人に対して、印象が変わった。どこの家の人でも頑張っているんだなって(E)
- ・すごろくトークに参加した後、“居るかな？”って探します。いたらいなって思います(F)
- ・いろいろ悩みはあるけど、友だちと電話じゃなくて直接話せる人がいるのがいいですね(F)

V. 総合考察

子育て支援の方法として構成的グループ・エンカウンターを取り入れた活動を行い、参加した母親の心情の変化を分析した。その結果、子どもの出産を機に、以前の生活リズムや人的環境が大きく変化したことによる子育てに対しての困難感や不安感、孤独・孤立感を感じていた母親が、すごろくトークを媒体として人と容易に話すことができ、母親の心情が肯定的に変化した可能性が示唆された。

1. 構成的グループ・エンカウンターを用いる利点

構成的グループ・エンカウンターのすごろくトークを母親の主体性やエンパワメントを促進し、気軽に話ができる場づくりのための支援方法として導入した。その結果、普段友人関係でも話題に挙がらない家庭での夫の役割など、その人の自慢とも受け取られてしまう恐れがある話題についても、ゲーム感覚で話を進めることができ「人と話すことが楽しかった」「自分のことを話せた」などの肯定的な感想が得られた。「人と話すことが楽しかった」という感想に関しては、普段から広場を利用して人と話がしたいという気持ちは持ちつつも、共通の話題が見つからない、話したくないかもしれないという相手への気遣いがあったのに対し、すごろくトークでは話すテーマが指定されていたことや、参加者全員が話すことを目的として参加しているという場の設定が、母親がリラックスした気持ちで話すことに役立っていたと推察

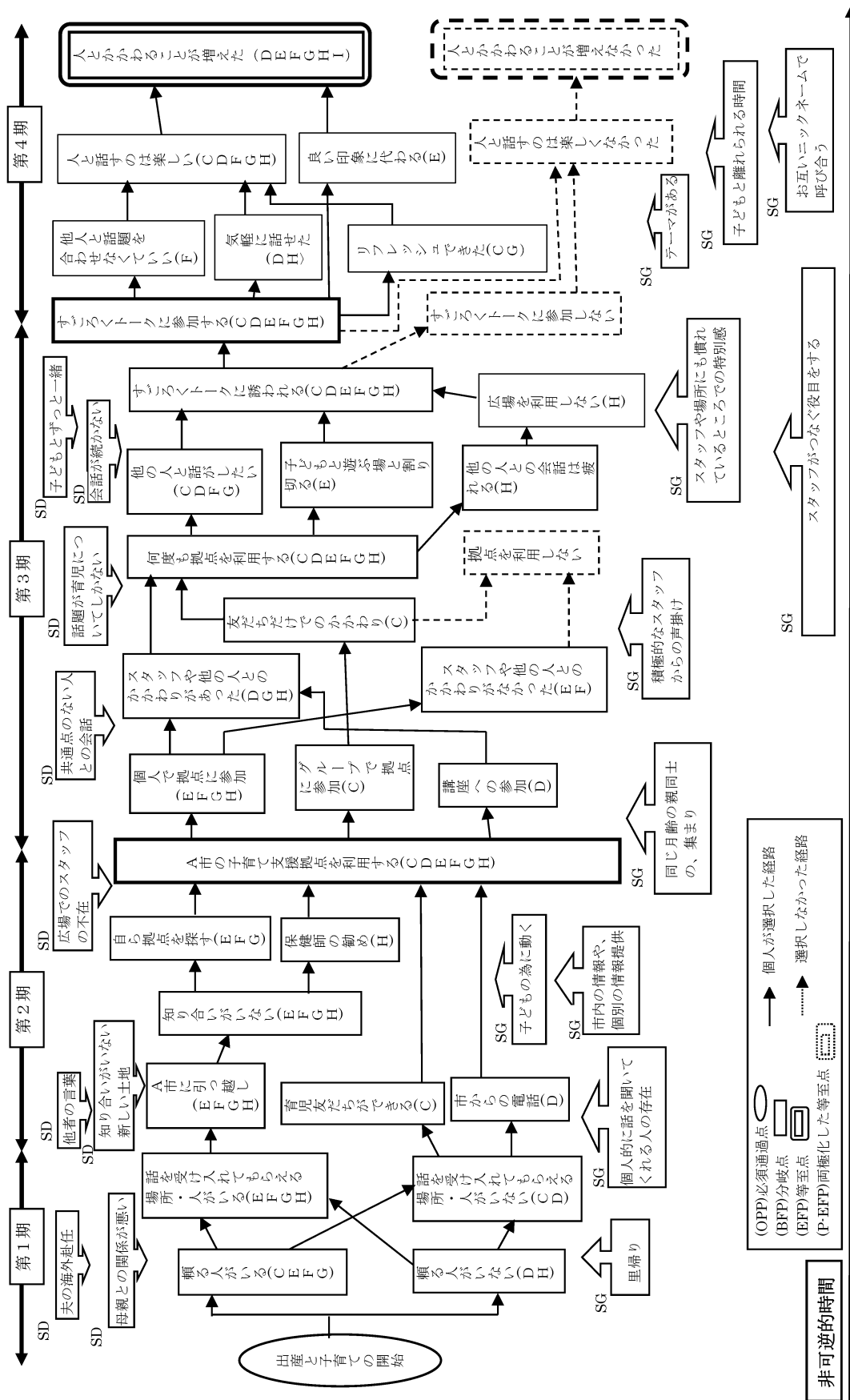


図1 総合TEM図

される。また、「自分のことを話せた」という点についても、子育てを助けてくれる夫の役割を話す機会は普段ほとんどないと考えられるため、話した側にとっては他の母親から「いいね」と言われたことに喜びを感じ、聞いた側にとっては子育てに関する情報として受け止めることができたのではないかと推測される。

今回、一人の女性として参加してもらうことを意図して、自らの呼ばれ方を決めたり、子どもから離れて参加する環境を設定したりした。呼び方については、参加者の母親から以前から「〇〇ちゃんのお母さん」という呼び方が気になっていたからニックネームで呼んでもらえることがうれしかったという言葉があった。名前を呼び、呼ばれることは、孤独を感じている人にとっては人とつながったと感じる経験の一つになるのではないかと推察される。また、少しの時間でも子どもから目を離してもいいという環境設定は、母親をリラックスさせ、笑顔で話をする姿に寄与していたのではないかと考えられる。すごろくトークを実施している際、母親の傍に行つて邪魔する子どもがいなかったことから、母親たちの楽しそうにしている姿が、子どもの行動や心情に影響を与えていた可能性も推測される。

参加した人数構成について、1回目は参加者が3名・橋渡し役スタッフが2名ですごろくトークを行った結果、トークをする回がそれぞれ3回ほどは回ってきたが、2回目以降は参加者が6名と多くなり、トークをする回数が減ってしまう状況になった。1回目から参加している母親からはもっと話したかったという言葉が聞かれたことから、参加人数3～4名に対して進行役1名・橋渡し役1名程度であると、それぞれが話せたという満足感を得られやすいのではないかと推測される。

2. 支援者に求められるかかわり方

地域子育て支援拠点のスタッフに求められる役割として、基本事業である「親子の交流の場」においてはスタッフと母親、母親同士のつながりを円滑に形成できるようにしていくことが基本であると考えられるものの、実際には各地域子育て支援拠点でのスタッフの母親に対するかかわり方は様々である。例えば、親子に積極的にかかわる拠点もある一方、スタッフは広場に駐在しても、スタッフがかかわることで母親同士が自然な会話ができなくなるという理由から、親子にかかわらない拠点もある。しかし、本研究の結果からは、気軽に話ができるよう交流を促進する・他の母親の言葉がSDとならないようにするといった観点から、スタッフが関与する必要性が示唆されたと考えられる。

また、インタビューからは、ニーズや状況はさまざま

であるが、それまでの子育て環境に欠けているものを求めて母親が子育て支援拠点の利用に至る過程が示された。子育て支援拠点の支援者は、母親それぞれのニーズや来所の経緯を把握したうえで、支援を行っていくことが望ましいと考えられる。母親それぞれが抱えている困難感や不安感は表面上では理解することは困難であり、母親が話してもいいという関係にならないと傾聴することは難しい。すごろくトークにスタッフが橋渡し役で参加したことによって、スタッフ自身の子育てについての話も聞くことになり、スタッフに対する親しみや安心感につながっていたかもしれない。スタッフがすごろくトークに参加して、リラックスした母親の話を聞くことは、母親の困難感や不安感、家庭的背景を自然に聞き取ることにもなり、それぞれの母親の支援において有益であると考えられる。

さらに、インタビューからは出産に対してある程度の知識は持っていたとしても、実際に子育てが始まると予想外の不安、困難を感じている母親がいることも示された。子どもや子育てについて本やインターネットなどで調べることもできるが、知りたい内容によっては適切な方法などが統一されていないため混乱を招く恐れもあると考えられる。出産後すぐに、専門知識をもった人との関係を構築する必要性があり、地域子育て支援拠点においては、子どものかかわり方だけでなく出産前後に起こる不安・困難・疑問に適切にすぐに答えることのできる人材の存在が重要であることが推測される。

なお、本研究では研究手段としてすごろくトークのあとにそれぞれの母親にインタビューを行い、TEM図を作成して分析したが、結果として母親が抱えている困難感や不安感を理解することにもつながった。子育て支援拠点における母親や子どもの行動・言葉などを記録し可視化していくことは、個々の母親に応じた支援を考えるために有効な手段の一つではないかと推測される。

3. TEM図から見たこと

地域の人とのつながりが希薄になっている今、すごろくトークの参加者の基本属性から鑑みても居住年数の長短と地域の人とのつながりはあまり関係がないように推察される。学生の頃からの友人がいても、子どもの有無で生活環境も違い、子どもへの理解も変わってくると考えられる。そのため、地域に知り合いがいることは子育てに関する支援者となる場合もあるが、孤立を感じさせる存在となる場合もあると考えられる。反対に、知り合いがいない新しい土地での子育ての場合、母親が孤立がちになることが危惧されるが、新しい土地だからこそ「子どものために」と自らが積極的に子育て支援拠点

を採る行動をしていることが分かった。子どものためであり、母親にとっての仲間探しではないと言いつつも、SDと捉えられる「広場でのスタッフの不在」についての語りがあったことから、他人とのかかわりを必要としていることが分かった。TEM図に示された経路から、出産という環境の変化を一つの区切りとして、母親自らが新しい人間関係や地域とのつながりを子育て支援拠点に求めていることが分かった。

また、子育て支援拠点において基本事業の一つに「子育て仲間の交流の場」があるが、子育て支援拠点に参加している母親からは「共通点のない人との会話」「会話が続かない」「話題が育児についてしかない」という内容がSDとなっていたことから、気楽に母親同士が会話をすることは難しいことが分かった。その結果として、すごろくトークを介して会話することについては「テーマがある」ことがSGとなっていたと考えられる。

TEM図から見えたことは、母親は子どものためには自ら積極的に行動することを厭わないが、他人からの評価を気にしたり他人に対して遠慮して自分を出せなかったりする場合があるということである。そのような課題を抱えつつも、母親となったからこそ今までとは違う人とつながり、子育てについての情報を得たいと思っている人がいるという状況があり、そのニーズに応えていく必要性が示された。

VI. 今後の課題

本研究の調査対象は子育て支援拠点を利用している6名の母親であり、一定の経験の多様性を可視化することができたものの、全ての経路を把握して類型化するには至っておらず、より多くの対象において検討を重ねていく必要がある。検討によって、すごろくトークを取り入れた子育て支援活動を導入するのに適した対象や方法が明確化されることが期待される。また、本研究においては、人とのつながりがより円滑に形成できるような子育て支援に必要な要素を含むエクササイズとしてすごろくトークを中心としたプログラムを実施したが、コミュニケーションを促進する構成的グループ・エンカウンターエクササイズは数多くある。子育て支援活動に適したエクササイズやプログラム内容に関する検討を継続することで、より多様なニーズに応じた支援の展開につながると推測される。

また、本研究で行ったすごろくトークにおいてスタッフが母親と一緒に参加しながら気持ちを共有し話をしたことで、母親たちの理解やスタッフとの関係形成に役立った可能性がある。個々の母親に応じた支援を考える

ためにも母親とのコミュニケーションは重要であるが、一方で母親とのかかわり方に苦手意識を持っている場合もあると考えられる（善本，2003）。支援者及び母親たちの橋渡し役としての声のかけ方・かかわり方に着目して検討を行い、支援者としてのスキル向上・育成につなげていく必要がある。

本研究のプログラム参加者間では、実施後に「ちょっとしたつながり」の形成がみられた。家族や友人のように考え方が近い関係のみに留まるのではなく、多様な情報を持っている人とつながることができる機会や場を設定することは、母親の視野を広げ、孤独・孤立や子育て中におこる困難の軽減につながるのではないだろうか。また、子育て拠点を利用している母親間のつながりだけではなく、地域で生活をしている子育て中の人や子育てを終了した人、出産前の妊婦など多種多様な人たちとのつながりも有用ではないかと推測される。近年、社会科学等の分野において「人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることができる、『信頼』『規範』『ネットワーク』といった社会組織の特徴」（内閣府国民生活局市民活動促進課，2003）である「ソーシャル・キャピタル」という考え方が用いられるようになってきた。子育て中の母親を取り巻く社会についてソーシャル・キャピタルの視点から考えることによって、必要な子育て支援のあり方についても示唆が得られるのではないかと考えられる。

文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）．複線経路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例 立命館大学人間科学研究, 25, 95-107.
- 東雅代・西村真美子・米田昌代・井上ひとみ・梅山直子・宮中文子・樫田智香子・和田五月・松井弘美（2009）．乳幼児をもつ母親の育児困難の状況－母親および子育て支援に関わるエキスパートへのフォーカス・グループインタビューから－石川看護雑誌, 6, 1-10.
- 松田茂樹（2008）．何が育児を支えるのか－中庸なネットワークの強さ－ 勁草書房
- 内閣府国民生活局市民活動促進課（2003）．平成14年度ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて <https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital>（2022年10月16日閲覧）
- 中谷奈津子（2014）．地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化－支援者の母親規範意識と母親のエンパワメントに着目して－ 保育学研究, 52, 319-331.
- 中山文子（2016）．乳幼児育児中の母親の現状と子育て支援に関する研究～塩尻市乳幼児健診アンケート調査から～ 地域総合研究, 17, 63-72.

落合恵美子 (1994). 21 世紀家族へー家族の戦後体制の見かた・超えかたー 有斐閣

汐見和恵 (2010). 揺らぐ子育て基盤ー少子化社会の現状ー 勁草書房

富田久枝 (2010). 保育現場における親支援とカウンセリングアプローチー親育ちセミナーで実施した構成的グループ・エンカウターの効果ー 鎌倉女子大学紀要, 17, 95-102.

上田よう子 (2018). 地域子育て支援拠点における利用者の心情変容プロセスを支える支援に関する研究ー複線経路・等至性モデル分析による支援の検討ー 保育学研究, 56, 111-119.

浦山正美・金山克子・大木秀一 (2009). 母親の身近な人間関

係におけるストレス感と不適切な養育行動の関連性について 石川看護雑誌, 6, 11-17.

安田裕子・サトウタツヤ (2012). TEM でわかる人生の経路ー質的研究の新展開 誠信書房

善本孝 (2003). 保育におけるコミュニケーションー保育士にもとめられるコミュニケーション能力に関する調査からー 横浜女子短期大学紀要, 18, 47-64.

付記

本研究に関して、開示すべき利益相反事項はない。

資料

構成的グループ・エンカウターで使用したすごろくシート

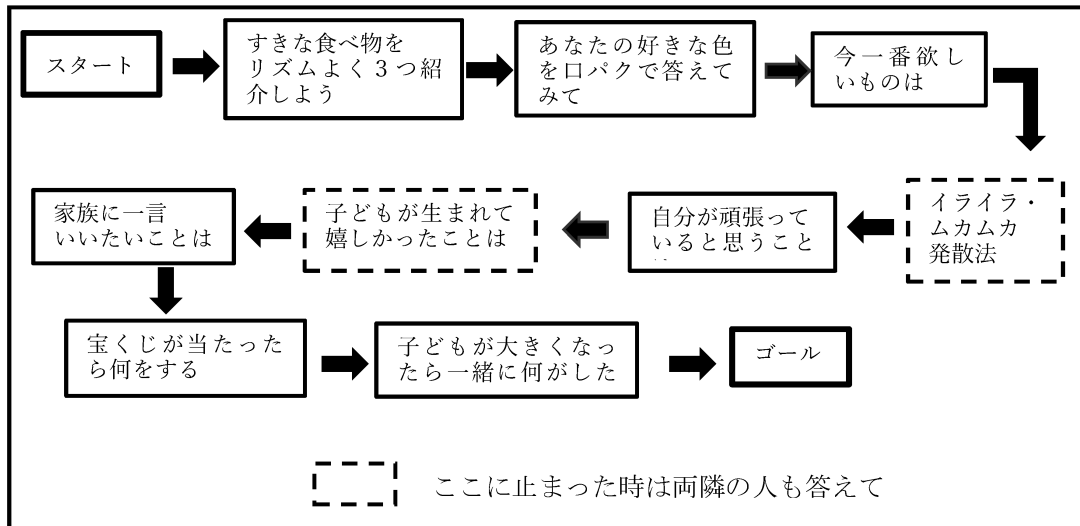


図2 すごろくトーク 1回目シート

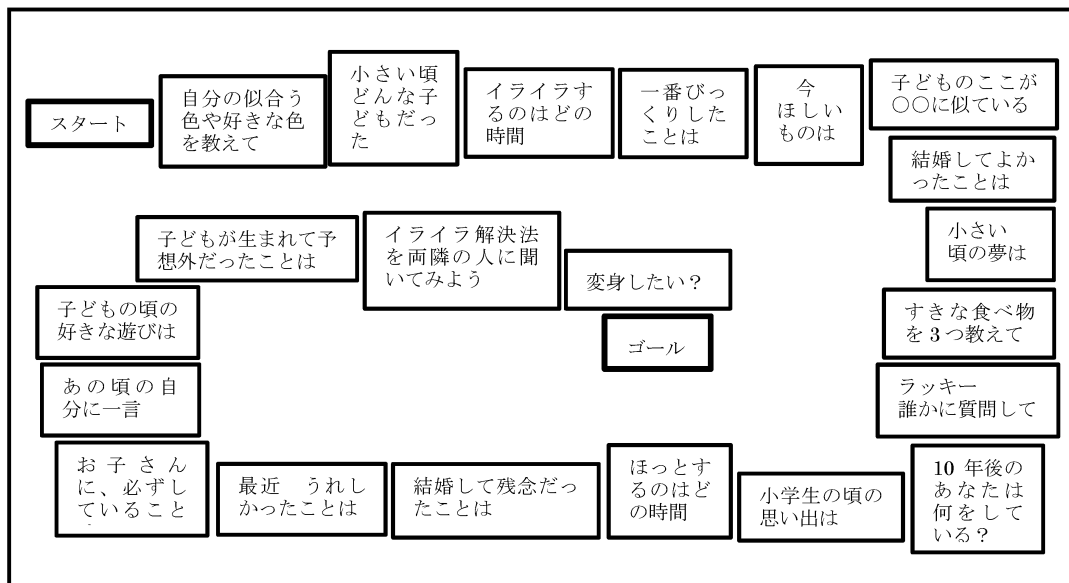


図3 すごろくトーク 2回目シート

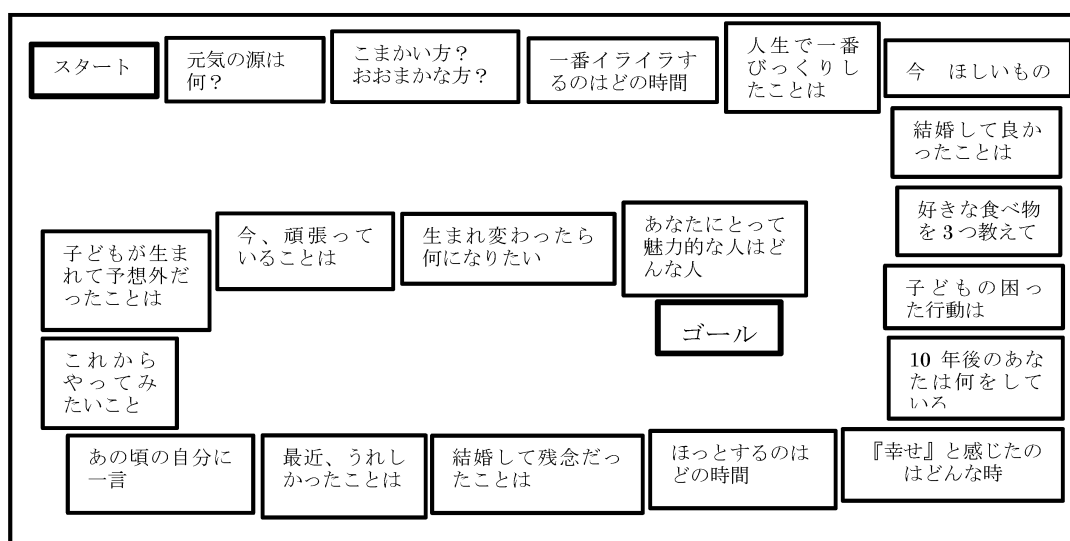


図4 すごろくトーク3回目シート

Supporting Parenting with Structured Group Encounters : an Analysis of Mothers' Emotional Transformation Using the Trajectory Equifinality Approach

Satoko Takahashi Shuntaro Watanabe

Osaka University of Comprehensive Children Education

Mothers today face difficulties in forming a child-rearing network and are thought to be seeking an environment where they can connect and talk with others casually to obtain a form of local child-rearing support. This study aimed to examine the effectiveness of such support. We conducted activities within a structured group encounter as a method of child-rearing support that provides a place where mothers can connect and talk casually with others. Subsequently, we analyzed the changes in their emotional states. Participating mothers engaged in a type of structured group encounter called Sugoroku talk as a support method. They were then interviewed, and a qualitative analysis was conducted using the trajectory equifinality approach. The analysis revealed a positive change in the mothers who were not seeking connection with others or were cautious in their conversations as they were able to have casual conversations with others in Sugoroku talk. The results demonstrated the importance of the role of supporters in connecting mothers with each other as well as the effectiveness of using Sugoroku talk as a support method.

Key words : child-rearing support, community child-rearing support center, structured group encounter, trajectory equifinality approach